

こまつしま リビングラボ

地域創生センター



小松島市役所ロビーに掲示された、「こまつしまリビングラボ推進本部」の看板を前に左から、ハンク・クーネ氏、吉田地域創生センター長、濱田小松島市長、ロバート・ヘイスティング氏。



社会共創キャンプ参加者集合写真。



社会共創キャンプ(小松島市役所会議室)風景。

地域社会の問題解決のために

地方創生が叫ばれていますが、少子高齢化と若者流出による人口減少に歯止めがかりません。気候変動、大地震・大津波など、自然の脅威、大災害への備え・対処がますます大きな課題となっています。またそもそも、地方の良き風土、大自然、伝統・文化を感じながら、ゆったり、のびのび安心して子育てできる社会になかなかなりません。そのような社会ではひとりひとりが、能力を活かして健康でイキイキと働ける、そんな幸福感を手繰り寄せることは容易ではありません。

こうした「地域社会の根本的問題」あるいは、従来のやり方や単独の取り組みでは歯が立たない社会全体の問題に効果があり、持続・成長する地方を取り戻す可能性を秘めたイノベーションプラットフォームとして今「リビングラボ」が注目されています。

欧州ではすでに440を超えているリビングラボが活動を始めつつありますが、日本では始まったばかり。この先端のまちづくり手法をいち早く取り入れ、四国で初めての試みとして2018年4月よりスタートしたのが、こまつしま



リビングラボ「(KLL)プロジェクト」です。徳島大学(地域創生センター)が小松島市、JA東とくしまと連携して国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)の「2018年度科学技術コミュニケーション推進事業(未来共創イノベーション活動支援)」に提案し、32倍の難関を突破して採択されました。

リビングラボの特色

リビングラボのポイントは以下の5つです。①開かれた「場」をつくり、産官学民の新しい枠組みで多様な人たちが集まる(つながりと共感による地域創生)。②地域課題の本質を市民の目線で解きほぐし、本に必要なことは何かを見つけ出す(問題発見と新しい価値の創

造)。③持続・成長する社会像を描き、そこに到るプロセスを共有する(デザインと物語づくり)。それを、④形にして見えるようにする(共創とプロトタイプング)。⑤最新の科学研究、テクノロジーの応用を含め、社会の中で試してみる(社会実装と評価)。

KLLのこれまでとこれから

こまつしまリビングラボがスタートして8ヶ月が経過しました。この間、有志の力で、ほんほこ大学院(正式名称:社会イノベーション&共創大学院)という、リビングラボの実践的勉強会を立ちあげました。楽しくイキイキとした学びの場となり、そこから新しい地域づくりチャレンジジャーが輩出され、ビジネスリーダーが誕生しました。

続いて「社会共創キャンプ」を11月に行いました。オランダ、米オレゴン州ポートランドから専門家(ハンク・クーネ氏とロバート・ヘイスティング氏)を招いて、小松島市役所に出前フューチャーセンターA・Bを特設し、6年後の未来づくりを開始しました。濱田小松島市長も参加し、市民、地域の事業者、高校生、東京に本社を

置く大企業、自治体職員、地域外からの参加者などが知恵を出し合いました。お互いのアイデアに耳を傾けました。地域の資源、現状を様々な視点から見直し、新たな発見から未来をデザインし形にする作業を4日間行いました。4月からの8ヶ月間を土台にしたこの4日間から、小松島の農業と移住、港や観光コンテンツの活性化、中心市街地問題、水をテーマにした循環型社会形成などにインパクトを与えるビジネスプランが芽を出し、動き出しました。地域を巻き込みながらのスピードアクションで、新会社立ち上がる勢いです。これが「こまつしま物語」の1ページです。今後さらに具体化され、共有されるものと考えています。来年度は、チャレンジジャーをさらに広く募集し、より多様な参加者による共創を実践していきます。また、新たな地域拠点「社会共創ラボ」を形成します。3年目の2020年には、行政とともにこれらの活動を発展させる政策形成に取り組みます。



こまつしまリビングラボのホームページです。是非ご覧ください。
<https://kll.itlab.org/report/2082/>